仏教混交サンスクリット語における a- 語幹名詞の語末 -a について

――Larger Sukhāvatīvyūha と Saddharmapuṇḍarīkasūtra に基いて――

稲　葉　維　摩

1. はじめに

古期、中期インド・アーリヤ諸語の名詞[1] は語形変化（屈折）によって性・数・格を区別する。本稿が扱う仏教混交サンスクリット語（Buddhist Hybrid Sanskrit）の a- 語幹名詞の変化には、語末が -a で終わる形が知られている。例えば deva-「神」という名詞は deva という形で文に現れる。結果的に語幹の形のままであるため、これだけでは性・数・格がわからず、他の変化形と比べると多義的である。本稿ではこの語末 -a について検討する。

従来、語末 -a は変化形として、音変化の点から理解されてきた。しかし、語末 -a には出現環境や傾向があると考えられる。-a は語形変化した同格の語や、対格を取る動詞とともに現れる環境などで用いられる。また、主格と対格を表す場合が圧倒的多数であり、他の格ではわずかであるという傾向がある。本稿では Larger Sukhāvatīvyūha（Sukh）と Saddharmapuṇḍarīkasūtra（SP）の範囲で、まず語末 -a の現れる環境を示す。次に、主格と対格の多さに注目し、格標示の点から整理する。以上のことから、語末 -a は性・数・格を標示する変化形とは考え難いこと、語幹のまま現れていて環境によっ

1　他の印欧語と同様、サンスクリット語では形容詞と名詞の間に区別がないため、形容詞も含めて名詞と呼ぶ。本稿でも特に形容詞に言及しない場合、両方を含めて名詞という。

て性・数・格の理解が補われると考えられることを述べる。

2. 仏教混交サンスクリット語の概観と名詞語形変化の問題

仏教混交サンスクリット語に入る前に、サンスクリット語から見ておきたい。サンスクリット語という名称は、狭義には文法家パーニニ（紀元前6世紀頃）以降の古典サンスクリット語を指すが、広義には『リグ・ヴェーダ』（紀元前1200年頃）を始めとするヴェーダ文献の言語であるヴェーダ語を含む（本稿では狭義に用いる）。ヴェーダ語と古典サンスクリット語は古期インド・アーリヤ語に分類される。これに対して、様々な点で言語変化が起こった諸言語を中期インド・アーリヤ諸語と呼ぶ。

仏教混交サンスクリット語は中期インド・アーリヤ諸語やサンスクリット語が混ざり合った言語である。紀元前3世紀頃に仏教は多くの部派に分かれていき、紀元前後には大乗仏教の文献が作成されていった。仏教文献は部派ごとに異なる中期インド・アーリヤ諸語で伝えられていたが、一方でサンスクリット語も用いられるようになり、様々な方言的特徴やサンスクリット語が入り混じった言語ができあがっていった。この言語を仏教混交サンスクリット語と呼ぶ。主な文法書と辞書はEdgerton（1953）である[2]。

Edgerton（1953）によって仏教混交サンスクリット語の全体が把握できるようになったが、より具体的なことはまだわかっていない。本稿が問題にするa-語幹名詞の語形変化を見てみよう。サンスクリット語の名詞は性・数・格を区別する。性は男性・中性・女性の3つ、数は単数・両数・複数の3つ、格は主格・呼格・対格・具格・与格・奪格・属格・処格の8つである。まず、(1)、(3) にサンスクリット語a-語幹男性・中性名詞のパラダイムを示した。次の (2)、(4) はEdgerton（1953: 48-60）に基づく仏教混交サンスクリット語のパラダイムである[3]。(1)、(3) に比べて、(2)、(4) には多くの語形が存在することに注目したい。

2　最近ではOguibénine（2016）が大衆説出世部の文献を中心として、音韻を論じている。

（1）サンスクリット語 a- 語幹男性名詞 deva-「神」

	単数	両数	複数
主格	devas	devau	devās
呼格	deva		
対格	devam		devān
具格	devena	devābhyām	devais
与格	devāya		devebhyas
奪格	devāt		
属格	devasya	devayos	devānām
処格	deve		deveṣu

（2）仏教混交サンスクリット語 a- 語幹男性名詞

	単数	両数	複数
主格	devo(-u), deva(-ā), deve, devaṃ	deva	devā, deva, deve(-i), devāyo(-āya), devas, devo(-u), devān(ṃ), devāni
呼格	devā, devo(-u), deve		devā, deva, devāho
対格	devu, deva, devo, devā, devāṃ		devām(ṃ), devā, deva, devās, deve, devu, devāni
具格	devenā, devasā, devayā(-āya), deva		devehi(-ehī), devebhis, devebhi(-ebhī)
与格	devaya(-āyā), devāye		
奪格	devā, devātas(-āto, -ātu, -ato, -atu), deva		
属格	devasyā, deva		devāna, devānaṃ(ṃ, -ānu), devān(ṃ)
処格	devi, devasmin(-asmiṃ, -asmi), devesmin(-esmiṃ, -esmi), deva		

3　仏教混交サンスクリット語にはサンスクリット語の変化形も含まれるのだが、Edgerton（1953: 48–60）はサンスクリット語に現れない語末だけを取り上げている。それに基いて（2）、（4）の表を作成したため、空白の欄がある。Edgerton（1953）が疑問視している形と特定の文献や語にしか現れない形、代名詞への言及を省略し、音変化や韻律などによる揺れと考えられている形を、語末 -a を除いて、適宜（　）にまとめた。例に用いた名詞は筆者による任意の選択である。その名詞にすべての語形が在証されるわけではないのだが、簡便さを求めて１つの名詞を用いた。

（3）サンスクリット語 a- 語幹中性名詞（他の格は a- 語幹男性名詞と同じ）dāna-「付与、布施」

	単数	両数	複数
主格	dānam	dāne	dānāni
対格			

（4）仏教混交サンスクリット語 a- 語幹中性名詞（他の格は a- 語幹男性名詞と同じ）

	単数	両数	複数
主格	dānu, dāna, dāno, dānā, dānāṃ		dānā, dāna, dānāṃ, dānāṃsi
対格			

以上の表から、仏教混交サンスクリット語の変化形には多くのバリエーションのあることがわかる。それぞれは音変化や他のパラダイムとの関連、韻律の都合といった様々な観点から説明されている（Edgerton 1953: §8）。一例をあげると、（2）の主格単数には -o、-u、-a、-ā、-e、-aṃ の語末がある。a- 語幹男性名詞の主格単数の語尾は -s に遡り、サンスクリット語では devas である。この語末 -as は中期インド・アーリヤ諸語で音変化し、西部方言では -o、東部方言では -e で現れる。-u は -o の音変化したもの、本稿で問題とする -a は基本的に韻文に現れるもので、-ā は -a が韻律の都合で伸ばされたもの、-aṃ は中性の主格・対格単数か男性の対格に由来すると言われる。

このように主格単数だけを見ても、音変化による揺れを初め、方言的な特徴や名詞の性の違い、韻律の都合など、様々な要素が混在していることがわかる。それぞれの語形が自由な揺れなのか、現れる環境や傾向があるのかはわかっていない。（2）、（4）のような仏教混交サンスクリット語のパラダイムはバリエーションの一覧に過ぎない。実際には文献によって現れる語末が異なるため、個別の検討が必要になる。今回、語末 -a の使用には明確な傾向があり、-a を変化形と考えるのは難しいことがわかった。今

後はこのような検討を通して、より具体的な体系を導き出すことが必要である。

3. 本稿で扱うテクストについて

近年、仏教混交サンスクリット語文献の伝統的な校訂本の多くは校訂の仕方や写本の扱いなどの根本的な面で問題が指摘されていて、再校訂が必要な状況にある。本稿では対象とするテクストに Sukh と SP を選んだ。Sukh には新しい校訂本（Fujita 2011）が出版されていて、上記の問題が解消されていると言える。

SP には主にネパール系、ギルギット系、中央アジア系という 3 種類の写本の系統がある。その詳細については渡辺（1974）、辻（1982）などに詳しい。現在では個々の写本をテクストとして用いた方がよいと思われるため、本稿ではファクシミリ本の Lokesh Candra（1976）を Toda（1981）がローマ字化し再校訂した中央アジア系のカシュガル写本（O）を使用した。中央アジア系の写本はネパール系などよりも中期インド・アーリヤ諸語の語形をよく保っていると言われ、Toda（1981）にはサンスクリット語と異なる変化形の出現箇所がほぼ網羅されている。そのため、本稿の扱う問題に関して調査が簡便である。さらに、Sukh と SP には各写本の対照本が出版されており、現代語訳や仏教学の研究も多く、今後、比較や内容にも立ち入りやすい[4]。

Edgerton（1953）は仏教混交サンスクリット語文献を言語の状態から大きく 3 期に分けている。第 1 期は韻文、散文ともに仏教混交サンスクリット語のもの、第 2 期は韻文が仏教混交サンスクリット語であり、散文はほぼサンスクリット語になっているもの、第 3 期は韻文も散文もほぼサンスクリット語になっているものである。Sukh と SP は第 2 期に属する。

4　Sukh の写本対照本は Fujita（1992–1996）である。SP の写本や出版について戸田（1997）や勝崎・小峰・下田・渡辺（1997：95–111）などに詳しい。Karashima（2003）以降では漢語訳とチベット語訳も含めた SP の新しい校訂が行われている。

4. 語末 -a の検討

4.1. 語末 -a の問題点と見通し

それでは a- 語幹名詞の語末 -a について見ていきたい。語末 -a は名詞にも形容詞にも現れ、それは結果的に語幹のままの形である。Edgerton（1936, 1953: 48）によれば、-a は単数のあらゆる格と複数の主格と対格に現れるが、主格と対格以外の例はわずかである。また、その出現はほぼ韻文に限られ、散文では極めてまれである。事実、本稿の扱う文献でも主格と対格が圧倒的多数であり、他の格では、処格が SP に 7 回と副詞的に用いられる語に現れるだけだった。また、韻文に限られ、散文には現れなかった[5]。

Edgerton（1936, 1939, 1953: 48）は語末 -a の由来を音変化や類推に求める。すなわち、中期インド・アーリヤ諸語では語末が子音で終わらないため、主格単数の語尾 -as や対格単数 -am、奪格単数 -āt の末尾の子音が落ちる。処格単数 -e はサンスクリット語の外連声で、a 以外の母音と隣り合う時に -a となる。こういった状況で現れた -a や -ā が一般化され（-ā は韻律の都合で短くなり）、他の格に広がったと述べる。同時に、中期インド・アーリヤ諸語に属し、音変化や格の融合（syncretism）が顕著なアパブランシャ語などに言及する。それらの言語には語末 -a の存在がしばしば言及されるからである[6]。

しかしこのような考えには問題があると思われる。そもそも主格と対格以外の格では、語末 -a はわずかしか現れない。主に韻文に現れ、散文ではまれである。（2）に見られるように、仏教混交サンスクリット語の語形変化は基本的にそれぞれの格を明確な語末によって区別しているため、-a はむしろ不規則と言える。その点で、格の融合が顕著なアパブランシャ語な

5　なお、Sukh の写本によっては散文にも散発的に語末 -a が現れる。しかし今のところ、統一性があるようには見えないため、ここでは取り上げないこととする。

6　Dschi 1994, von Hinüber 2001: §296, 297 などを参照。アパブランシャ語の語末 -a に関しては、文法家ヘーマチャンドラ（紀元 12 世紀）の規定がある（Pischel 1900: §364, Edgerton 1939）。

どとは異なる。明確な語末が格の標示を担っているのに、その一方で格が -a に融合されているとは考えにくい。

Edgerton（1936, 1953）は上述のように音変化や類推に由来を求める一方で、極めて簡単にだが、語末 -a がほぼ韻文に限られていることから、韻律の都合に関わるとも記している。例えば（2）の主格単数の内、語末 -o、-ā、-e、-aṃ は長い音節である。韻律上短い音節が規定される位置にこれらの語末が来ると、韻律に合わなくなる。この問題を解消するために語末 -a が用いられたと考えるのは、-a がほぼ韻文にしか現れないという事実に即している。そのため、音変化などに由来を求めるよりはむしろ妥当だと思われる。

本稿では語末 -a の現れる環境に注目する。その環境では他の語との関係から -a の解釈を補うことができる。Edgerton（1953: 48）があげる主格と対格以外の -a にもこのことがよく当てはまる。従って、語末 -a は自由に現れているとは言えず、-a を変化形と考えるのは難しいだろう。結論にはさらなる検討が必要だが、以上のことを踏まえれば、-a は韻律の都合などによる語形変化の省略と考えられそうである。なお、本稿で扱うテクストには主格・対格・処格と副詞的に用いられる語の他に -a は確認されなかったため、その他の格の検討は今後の課題とする。

4. 2. 語末 -a の出現状況

では、語末 -a の例を見ていこう。Sukh と SP において -a は韻文に現れる。韻文は 4 行詩で、韻律は音節の長短の組み合わせやモーラによって規定される。Sukh pp. 10–12 の詩節の韻律は（proto-puṣpitāgrā 的）aupacchandasaka、25–28 の詩節は proto-puṣpitāgrā、46–47 の詩節は triṣṭubh, jagatī、50–57 の詩節は triṣṭubh, jagatī, vaitālīya、75–78 の詩節は triṣṭubh, jagatī, śloka である[7]。SP（O）の詩節の韻律は triṣṭubh, jagatī, śloka である。本稿で引用する原文の “|, /, //” は行の区切りで、“|” は 1 、 3 行目、“/” は 2 行目、“//” は 4 行目を表す。語末 -a の語を原文ではイタリック体、和訳では下線で示し、関係する語を語末 -a の語とともに太字で示した[8]。

まず、語末 -a を持つ語が語形変化した同格の語とともに現れる場合を見る。(5) では主格単数に語形変化した gabhiru「深遠な」、vipulu「広大な」、prāptu「達成されている」、dharmo「ダルマ」とともに語末 -a の語 sūkṣma「微妙な」が現れている。(6) 1 行目では主格複数 imi「これ（代名詞）」、evarūpā「この通りの」とともに語末 -a の語 viśiṣṭa「特別な」と varapraṇidhāna「最高の誓願」が用いられている。(5) では形容詞、(6) では形容詞と名詞が -a である。このように、語末 -a は名詞にも形容詞にも現れる。語形変化した同格の語と現れる傾向は最も頻繁に見られ、今後あげる例にも多数確認される[9]。

(5) Sukh 10 v. 3 (aupacchandasaka) **gabhiru vipulu *sūkṣma* prāptu dharmo** |
「**深遠で、広大で、微妙なダルマが達成されている**」。

(6) Sukh 25 v. 1 (proto-puṣpitāgrā) saci mi **imi *viśiṣṭa*** na_**evarūpā** | ***varapraṇidhāna*** siyā khu bodhiprāpte /
「もし私の**これら特別な最高の誓願が**、さとりを達成した時に**この通り**でないならば」。

次は、語末 -a の語が対格を取る動詞とともに現れる場合である。語順としては、語末 -a の語が動詞に先行することが多いが、後続する場合も両者

---

7 Sukh の韻律の分析は阪本（後藤）(1994、1996)、福井（1995、1998、2001）による。これらの研究を参考に韻律の典型を示すと次の通りである。⏑ は短音節、- は長音節を表す。aupacchandasaka:（1、3 行）⏑⏑⏑⏑⏑-⏑-⏑-⏑̄, (2、4 行）⏑⏑⏑⏑⏑⏑⏑-⏑̄-⏑̄-⏑̄; proto-puṣpitāgrā:（1、3 行）⏑⏑⏑⏑⏑-⏑-⏑-⏑̄, (2、4 行）⏑⏑⏑-⏑⏑-⏑-⏑-⏑̄; triṣṭubh: ⏑̄-⏑̄-⏑⏑⏑̄-⏑-⏑--; jagatī: ⏑̄-⏑̄-⏑⏑⏑̄-⏑-⏑-; śloka:（1、3 行）⏑⏑⏑⏑⏑--, (2、4 行）⏑⏑⏑⏑⏑-⏑-.　なお、Sukh p. 3 の韻文はサンスクリット語であるため、ここでは考慮に入れなかった。

8 SP (O) では［　］が取り除くべき文字を、(　) が判読できなかったり欠けている文字の補いを表している。本稿で引用する際に前者は削除し、後者はそのままにした。標準的なサンスクリット語のつづりと異なる場合が多いが、すべてそのまま引用した。和訳の〔　〕は筆者の補いである。

9 しかし、基準が定まっていないため、延べ数などを数えることはまだできない。

の間に語が入る場合もあり、固定していない。いずれにせよ、-a は対格の関係にあることが示される。(7) では定動詞 deśeti「示す」（使役形直説法現在３人称単数）に語末 -a の語 dharma「ダルマ、教え」が先行している。(8) ４行目では動詞 paryeṣate「探す」（直説法現在３人称単数）に bhakta「食べ物」が後続している。(9) １行目では動詞 kuryā(n)「なしうる」（願望法現在３人称単数）と saṃtrāsana「震撼させること」の間に語が入っている。なお、(8) ２行目 kṛpaṇaka「哀れな」は語形変化した同格の語とともに現れている。(9) ３行目は動詞 kuryā(n) の省略が文脈から理解されるので、niṣkālana「追放すること」は１行目 saṃtrāsana と同様に解釈できる。省略については 4. 3. でも述べる。

(7) SP (O) 31a.1 (jagatī) so ***dharma*** **deśeti** prajāna uttamo | (KN 1.58)[10]
「かの最上の者は**ダルマ**を人々に**示す**」。

(8) SP (O) 115b.1 (triṣṭubh, jagatī) sadāpi **bālas** tada tasya **putro** | **daridrraka(ḥ)** ***kṛpaṇaka*** nityakālam /
grāmeṇa grāmam anuca(ṃ)krramanta | **paryeṣate** ***bhakta*** tathaiva coṭakaṃm // (KN 4.11)
「彼の**息子**はその時、いつも**愚かで**、どんな時も**貧しく**、**哀れである**。集落を通って集落へと順に歩みながら、**食べ物を探している**、同様に衣服を」。

(9) SP (O) 271a.6 (triṣṭubh, jagatī) na tasya ***saṃtrāsana*** kaści **kuryā(n)** | na tāṭanā(ṃ) nāpi avarṇabhāṣaṇam /
nāpi asya ***niṣkālana*** jātu-r-asya[11] | (KN 13.37)

---

10 参考として、SP (O) には学界で伝統的に使われてきた校訂本 KN の詩節番号を併記する。

11 -r- は母音連続を避けるために挿入されている。直示の代名詞の属格単数 asya が２つあるのは解釈が難しい。KN 13.37 の読みは na cāpi niṣkāsana jātu tasya である。

「誰も彼を**震撼させることをなしえ**ない。打撃も不遜なことの発言も。この者を**追放すること**も」。

「～には…がある」という文は存在文や所有文と呼ばれる。誰にあるいは何にあるのかを属格で、何があるのかを主格で表す。この文にも語末 -a が現れるが、その際、属格は常に変化形で現れ、-a は主格に当たる。（10）１行目では１人称代名詞属格単数 mahyaṃ[12] と動詞 vidyate「存在している」（直説法現在３人称単数）とともに、語末 -a の mātsarya「独占欲」が現れている。（11）２行目では、語末 -a の saṃkalpa「計らい」が、語形は異なるが同じ１人称代名詞の属格単数 mama と動詞 āsi「あった、存在した」（未完了過去３人称単数）に並んでいる。なお、（10）３行目 ucchinna「断ち切られている」は主格複数 sarve「すべての」、pāpadharmās「悪いダルマ」とともに、（11）３行目 paripūrṇa「満ちている」は中性主格単数 praṇidhānam「誓願」、etad「それ（代名詞）」とともに現れている。

（10）SP（O）54b.6（triṣṭubh, jagatī）***mātsarya*** **mahyaṃ** na kadāci **vidyate** | īrṣyā mi nāsti na ca cchaṃdarāgaḥ /
ucchinna **sarve** mama **pāpadharmās** |（KN 2.58）
「どんな時も**私に独占欲は存在し**ない。妬みも私になく、意欲と激情もない。
私の**悪いダルマすべては断ち切られている**」。

（11）SP（O）55a.4（triṣṭubh, jagatī）yathā ca paśyāmi yathā ca cintitaṃ | yathā ca ***saṃkalpa*** **mamāsi** pūrve /
paripūrṇa mahya（ṃ）**praṇidhānam etad** |（KN 2.61）
「私が見ている通り、考えられている通り、以前、**私が計らいを持っていた**通り、私の**その誓願は満ちている**」。

12　１人称代名詞の属格単数は本来 mama であり、mahyaṃ は与格であった。中期インド・アーリヤ諸語では与格が属格に合流し、いずれの形も属格と与格の意味を表す。

項目を列挙する場合にも -a が現れる。(12) 1、2 行目では楽器を、(13) では危険な生物を列挙しているが、その中に語末 -a の語が並んでいる。なお、(13) 4 行目 āhāra「食べ物」は現在分詞 gaveṣamāṇāḥ「探す」とともに用いられていて、目的語の意味を表している。

(12) SP (O) 58a.6 (triṣṭubh) **vīṇā(ś) ca tāḍā(ḥ) paṇavā(ś) ca** yebhir | ***mṛdaṃga*** **vaṃśā(s) tuṇavā manojñā(ḥ)** /
ekāvacārā atha dve 'pi trīṇi | vādāpitā(s) te 'pi babhūva buddhāḥ // (KN 2.91)
「琵琶や打楽器や小太鼓や、太鼓や竹の楽器や好ましい笛を
そこで二重にも三重にも合わせて演奏している彼らもまた、ブッダとなっている」。

(13) SP (O) 92b.7 (triṣṭubh, jagatī) **āśīviṣā *yakṣa* surodrracittāḥ** | ***kumbhāṇḍa*** **pretā** 'tra bahū vasaṃti /
bhairaṇḍikā(ḥ) ***śvāna śṛgāla*** **vṛścikā** | **gṛdhrrāś** ca ***āhāra*** **gaveṣamāṇāḥ** // (KN 3.66)
「毒蛇達、ひどく恐ろしい心をしたヤクシャ達、クンバーンダ達、餓鬼達がここにたくさん住んでいる。
狐達、犬達、ジャッカル達、サソリ達、そして**食べ物を探し回っているハゲタカ達が**」。

Toda (1981:xviii–xxvi) には記載されていないが、SP (O) では処格の意味に解釈できる -a が 7 回見つかった。明確な語尾を持つ同格の語と並ぶ場合、単独で現れる場合がある。単独で現れる例は 4. 3. に取り上げ、ここでは同格の語と並ぶ例を見る[13]。

(14) 1 行目では処格単数 tahi「それ（代名詞）」とともに sarvaloka「すべ

13 引用しなかった他の例は SP (O) 33b.6 (KN 1.83) jñāna-m-anāsravasmi(ṃ), 357b.1 (18.62) ādarśa mrrāṣṭe である。

ての世界」が、（15）３行目では処格単数 pāṃsusminn「泥」とともに ārdrra「湿った」が用いられている。なお、（14）４行目の saddharma「正しいダルマ」は単独で現れていて、4. 3. で見るように文脈から主語に解釈される。（15）１行目 abhyāśībhūta「近くなっている」は同格の主格複数 te「それ（代名詞）」と paṇḍitāḥ「賢者」とともに現れている。

（14）SP（O）210b.6（triṣṭubh, jagatī）ṛddhiprabhūtās **tahi** ***sarvaloka*** | samantatas te daśasu ddiśāsu /
dharma(ṃ) prakāśitva yadāpi nirvṛtāḥ | *saddharma* teṣāṃ samam eva sthāsyati //（KN 9.16）
「彼らは神通力に富み、**そのすべての世界で**、十方に遍く、
ダルマを明かして、涅槃に入った時でも、彼らの正しいダルマはまったく等しく存続するだろう」。

（15）SP（O）224b.7（śloka）***abhyāśībhūta*** **te** bhonti | buddhajñānasya **paṇḍitāḥ** /
yathāpi ***ārdrra*** **pāṃsusminn** | āsanne vāri-m-ucyate //（KN 10.22）
「**かの賢者達は**ブッダの認識に**近くなっている**、
湿った泥に座っている時に水のことが言われるように」。

時間や空間の継続は対格で、場所や時点は処格で表され、副詞的に用いられる。このような語に -a が現れる傾向もある。（16）１行目の語末 -a の語 antarakalpa「中劫」は非常に長い期間の単位である。１行目 dvādaśa「12」と２行目 viṃśa-「20」は数詞であり、後者は antarakalpa とともに複合語を作っている。（17）２行目の pūrva-「先立つ」はよく処格で現れ、時点を過去に限定する。（11）２行目の処格単数 pūrve「以前」がその例である。（18）４行目の形容詞 saṃmukha-「顔を合わせた」は、仏教文献では頻繁に奪格で動詞 śru-「聞く」とともに用いられ、「～の（属格）面前で聞く」を表す[14]。

（18）3 行目 vicikitsa「疑い」は 1 人称代名詞属格複数 asmāka とともに現れているため、（10）、（11）に見た存在文・所有文に当たる。コピュラ動詞は省略される場合が多い。なお、vicikitsa は ā- 語幹女性名詞である。ā- 語幹名詞にも問題の語末 -a と、語幹のままに見える語末 -ā がある。これらの語末にも本稿で述べている傾向が当てはまるのだが、本稿の範囲から外れるため、ここでは詳しく取り上げない。

（16）SP（O）145b.7（jagatī）sa *dvādaśa antarakalpa* sthāsyati | saddharmaṃ *viṃśāntarakalpa* sthāsyati /（KN 6.24）

「彼は 12 中劫の間、留まるだろう。正しいダルマは 20 中劫の間、留まるだろう」。

（17）SP（O）170a.2（śloka）śūnyā acintikāḥ kalpā | atītā（ḥ）*pūrva* ye abhū /（KN 7.49）

「空っぽの考えつかない劫が以前、過ぎ去った時」。

（18）SP（O）302a.4[15]（triṣṭubh, jagatī）***vi*(*ci*)*kitsa***-m-**asmāka**[16] na kadāci tatra | śṛṇoma yaṃ *saṃmukha* nāyakasya //（KN 14.53）

「導師の面前で聞いたことについて、どんな時も**私達に疑いは**ない」。

4. 3. 語末 -a が単独で現れる場合

語末 -a は基本的に以上に示した環境で現れるのだが、単独で現れる場合もしばしばある。その場合、解釈は文脈によるところが大きいと考えられる。例を見てみよう。（19）2 行目 durgandha「ひどい臭い」や先にあげ

14　例えば、パーリ語仏典では次のような文 D II 115 sammukhā me taṃ bhante bhagavato sutaṃ sammukhā paṭiggahītaṃ「私はそのことを、尊き君よ、世尊の面前で聞き、面前で受け取った」が頻繁に現れる。sammukhā が奪格、bhagavato が属格、sutaṃ が動詞 śru- の過去分詞である。

15　3 行目は 13 音節である。

16　-m- は母音連続を避けるために挿入された子音である。

た（14）4行目 saddharma はそれぞれの文で主語としか考えられない。

（20）4行目 rājaputra「王子」の節は、vā「あるいは」によって先立つ節 rājā hy ayaṃ bheṣyati「というのもこの人は王なのだろうから」と等位接続されている。後続する節では定動詞 bheṣyati「だろう」（未来3人称単数）の省略が起きている。（9）3行目にも動詞の省略が見られた。なお、（20）1行目 satva「性質」は動詞 dr̥ś-「見る」の絶対分詞 dr̥ṣṭvā に先行していて、対格の意味を表している。

SP（O）には処格も単独で現れる。（21）4行目では drumamūla「木の根」が単独で現れていて、文脈から処格に読み取れる[17]。なお、（21）3行目 sthita「留まっている」は同格の主格複数 ime「これ（代名詞）」、buddhā(ḥ)「ブッダ」、aprameyā「計り知れない」とともに現れている。

（19）SP（O）99a.1（triṣṭubh, jagatī）apratyanīyāś ca bhavanti loke | pūtisya *durgandha* mukhātu vāyati /（KN 3.123）

「そして彼らは世界に敵対する者となる。腐ったもののひどい臭いが口から漂う」。

（20）SP（O）116a.1（triṣṭubh, jagatī）sa ca daridrras tahi ***satva*** **dr̥ṣṭvā** | vibhūṣitaṃ gr̥hapatino viśiṣṭam /

kahin nu adya-m-aham atra āgato | rājā hy ayaṃ bheṣyati *rājaputra* vā //（KN 4.16）

「そしてかの貧乏人はそこで、家長の持つ飾られ優れた**性質を見て**、『一体、私は今やどこに来てしまったのだろうか。というのもこの人は王か、あるいは王子なのだろうから』〔と考えた〕」。

（21）SP（O）243a.2（triṣṭubh, jagatī）**ime** ca **buddhā(ḥ)** ***sthita*** **aprameyā** | *drumamūla* śobha(ṃ)ti yathaiva padmā(ḥ) //（KN 11.7）

17　他の例は SP（O）210b.5（KN 9.15）loka, SP（O）301b.4（KN 14.49）loka である。

「**これらの計り知れないブッダ達が留まっていて**、まるで蓮のように、木の根元で輝いている」。

5. 主格と対格の多さについて

以上に語末 -a の現れる環境や傾向を示した。語末 -a は主格と対格を表す場合が圧倒的に多く、その他の格にはほとんど現れなかった。従って、主格と対格は語末 -a を取りやすく、その他の格は -a を取りにくいと考えることができる。このことを格標示の点から整理したい。

言語を格標示の仕方によって分類する際、典型的な自動詞の項である主語と、典型的な他動詞の項である主語と目的語に注目する。自動詞の主語と他動詞の主語を同じ格（主格）で表し、目的語をそれとは異なった格（対格）で表す型がある。これを対格型と呼ぶ（Dixon 1994, Blake 2001 など）。古期、中期インド・アーリヤ諸語は基本的に対格型の言語である[18]。主語と目的語を表す格は中心格（core cases）や文法格（grammatical cases）などと呼ばれる。その他の格は道具や場所など意味の点で区別されるため、周辺格（peripheral cases）や意味格（semantic cases）などと呼ばれる（Blake 2001, Haspelmath 2011 など）。中心格は文を構成する基本的な要素である。周辺格は必要に応じて用いられる。

語末 -a は主に主格と対格、つまり中心格に現れる。その場合、4. 2. に見たように語形変化した同格の語や対格を取る動詞とともに現れる場合が多い。存在文・所有文では -a の語は常に主語であり、属格が -a になることはなかった。このように、仏教混交サンスクリット語の主格と対格は、その示し手が省略されても、他の語や文の構造によって主語や目的語の関係を補うことができると言えるだろう。

それではその他の格はどうだろうか。先に述べたように、他の格は -a を取ることが難しいと考えられる。再び、仏教混交サンスクリット語のパラ

18　他動詞の過去分詞を用いた文では動作主が具格、目的語が主格で現れるが、本稿ではこのことについてひとまず言及しないこととする。

ダイム（2）を見てみたい。主格と対格とその他の格とを比べると、後者は語幹にさらに音節の増えた語末を持っており、明示的に格を標示している。（4）の a- 語幹中性名詞のパラダイムでは主格と対格が融合しているが、それ以外の格は（2）と同様、明示的な語末によって区別される。4. 1. に指摘したように、仏教混交サンスクリット語では明確な語末が格の標示を担っている。もしそれを省略すると、示し手を失うことになってしまう。特に周辺格では、同格の語と並ぶか、よく知られた副詞的な表現でなければ、意味の理解が困難になるだろう。そのため、周辺格は語末 -a を取りにくく、その使用を避けているのではないかと考えられる。

6. おわりに

本稿では、仏教混交サンスクリット語の a- 語幹名詞に現れる語末 -a について検討した。語末 -a はほぼ韻文に限られ、単数のあらゆる格と複数の主格と対格に現れる。実際には主格と対格に圧倒的であり、それら以外の格にはわずかしか現れない。本稿では、語末 -a の使用される環境が見いだせることを指摘した。語形変化した同格の語や、対格を取る動詞とともに現れる場合などである。

語末 -a が主格と対格に圧倒的に多く、他の格にはわずかしか現れないことについて、格標示の点から整理した。主格と対格は主語と目的語を表す。語末 -a を用いる場合でも、上述の環境においては性・数・格の理解を補うことができる。しかし、その他の格は明示的な変化形が格標示の示し手である。その示し手を欠いた語末 -a を用いることは難しいと考えられる。

このように、語末 -a の出現には傾向があると言え、自由に用いられているようには見えない。それ故、語末 -a は性・数・格を標示する変化形とは考え難い。

本稿の範囲は Sukh と SP に限られているので、以上のことを確定することはできないが、基本的な方向を示すことはできたと思われる。今後の課

題はより多くのテクストを用い、他の語形変化も含めたデータの収集である。また、語末 -a の現れる環境の具体的な基準が決まっていないため、出現の延べ数などを示すことができなかった。このことも今後の課題となる。

凡例

Sukh 10 v. 3＝Sukh 10 ページ第 3 詩節
SP（O）31a.1＝SP（O）31 枚目表 1 行目（b は裏を示す）
KN 1.58＝KN 第 1 章第 58 詩節

略号と参考文献

一次文献

D＝Davids, T. W. Rhys and J. Estlin Carpenter. 1890–1911. *The Dīgha Nikāya*. 3 vols. London: Pali Text Society.

Fujita, Kotatsu. 1992–1996. *The larger Sukhāvatīvyūha: romanized text of the Sanskrit manuscripts from Nepal*. Tokyo: Sankibo Press.

Sukh＝———. 2011. *The Larger and Smaller Sukhāvatīvyūha Sūtras*. Kyoto: Hozokan.

KN＝Kern, Hendrik and Bunyiu Nanjio. 1970. *Saddharmapuṇḍarīka*. Osnabrück: Biblio Verlag.

Lokesh Chandra. 1976. *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra: Kashgar manuscript*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

SP（O）＝Toda, Hirofumi. 1981. *Saddharmapuṇḍarīkasūtra: Central Asian Manuscripts Romanized Text*. Tokushima: Kyoiku Shuppan Center.

二次文献

勝崎裕彦、小峰弥彦、下田正弘、渡辺章悟（編）。1997。『大乗経典解説事典』。東京：北辰堂。

阪本（後藤）純子。1994。Sukhāvatīvyūha の韻律と言語：歎仏偈・重誓偈。『印度學佛教學研究』42-2：148–153。

———。1996。Sukhāvatīvyūha〔梵文無量寿経〕歎仏偈―原典批判と訳―。『人文研究　大阪市立大学文学部紀要』48-8：55–79。

辻直四郎。1982。法華経の言語。田中於菟彌、岩本裕、原実（編）『辻直四郎著作集』第四巻「言語学」215–228。京都：法蔵館。

戸田宏文。1997。法華経原典研究の現状と課題。『仏教大学総合研究所報』13：13–16。

福井真。1995。Sukhāvatīvyūha（梵文無量寿経）東方偈の研究。『待兼山論叢』哲学篇 29：1–15。

———。1998。Sukhāvatīvyūha（梵文無量寿経）の研究：流通偈を中心にして。『待兼山論叢』哲学篇 32：1-14。
———。2001。Sukhāvatīvyūha（梵文無量寿経）、東方偈の研究：和訳と註（1）。『待兼山論叢』哲学篇 35：1-15。
渡辺照宏。1974。法華経原典の成立に関する一考察。金倉圓照（編）『法華経の成立と展開』77-110。京都：平楽寺書店。

Blake, Barry J. 2001. *Case* (second edition). Cambridge: Cambridge University Press.
Dixon, Robert M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
Dschi, Hiän-lin. 1944. Die Umwandlung der Endung -*aṃ* in -*o* und -*u* im Mittelindischen. *Nachrichten von der Akademie der Wissenschaften in Gottingen*. Philologisch-Historische Klasse 6: 121-144.
Edgerton, Franklin. 1936. Nouns of the *a*-Declension in Buddhist Hybrid Sanskrit. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 1-1: 65-83.
———. 1939. Endingless Noun Case-Forms in Prakrit. *Journal of the American Oriental Society* 59-3: 369-371.
———. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. 2 vols. New Haven: Yale University Press.
Haspelmath, Martin. 2011. Terminology of Case. In Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.), *The Oxford Handbook of CASE*, 505-517. Oxford: Oxford University Press.
Hinüber, Oskar von. 2001. *Das ältere Mittelindischen im Überblick* (2., erweiterte Auflage). Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
Karashima, Seishi. 2003. A Trilingual Edition of the Lotus Sutra — New editions of the Sanskrit, Tibetan and Chinese versions. 『創価大学・国際仏教学高等研究所年報』6: 85-182.
Oguibénine, Boris. 2016. *A Descriptive Grammar of Buddhist Sanskrit: The language of the textual tradition of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādins*. Washington DC: Institute for the Study of Man.
Pischel, Richard. 1900. *Grammatik der Prakrit-Sprachen*. Strassburg: K. J. Trübner.

（真宗総合研究所東京分室 PD 研究員　仏教学）

〈キーワード〉格、語形変化（屈折）、韻律